



あとがき

誕生したのは仙台市二日町七九番地で、昔からある仙台市役所の北に隣接する北一番丁であった。父は塗装と看板の店を営み戦争中は多賀城海軍公廠に徴用されていた。終戦一ヶ月前の仙台大空襲で家を爆轟され、それでも全員命だけは助かり青葉神社に集合したのでした。当時小学校六年生の私は木町通国民小学校に通学しており校舎も焼失し講堂だけが残りました。中学、高校時代を多賀城町にて約三十年暮し港街塩釜に通学しました。学年で一番背が低く健康も恵まれず運動会は大嫌い、遠足に行っても友達に背負われて帰宅する有様で長生きはできないと思っていました。

美術部で絵を学び模型飛行機を友として暮していましたが父が五十一才で他界し生活の重荷が一挙にふりかかり独学で看板を書いて家計を支えることになった。母の苦勞たるや子供七人を抱えて大変なことだったろう。

しかし夢中で働くうちにふと気がつくとも身長も人並となり何でも食べられて健康になり恋知る頃となった。その人は絵の仲間でスキーも登山も愛好する人にほだされて山に行きたくなってきました。義兄たちの山は危険だ行くもんじゃねえの反対を押し切って登りはじめました。河北新報社の蔵王登山に応募し遠刈田温泉一泊、山伏の前夜祭を見学しエコーラインのまだ無い時代で合羽着ての長丁場を刈田岳に登頂、勿論お釜は見えずで宿で買った大型こけし一対には皇太子御成婚記念のサイン入りであった。

母との約束で三十才には結婚するとし山に通い続け個人では危険と覚り仙台YMCA山岳会に入会しました。当時YMCAは仙台の青年男女に開放された唯一の社交の場となっており十指に余るサークルが存在し、サークル同志で連絡会議を設けサークル新聞発行やソフトボール対抗試合やクリスマスダンスパーティを日之出会館で毎年催したり「歌声



バス」などで旅行したりして親睦を深めていました。洋画の趣味と登山の精進と併行してましたが山そのものをキャンパスに描き込むつもりがいつも果たせず大自然を掴む空しさに絵を断念、登山のお蔭で健康に自覚が生れ登山一筋と傾倒していった。

父は命名に当り濡れ手に粟の運勢を与えたと言っていたが、日本経済の好景気に支えられて仕事は潤澤で御得意様も二十社以上となり仕事の能率のため実弟を東北大農学部より引き抜き工場を泉市南光台に建て自営業アルプアートを創立したのは昭和四十八年であった。

登山と民謡会と消防団を三大道楽と称し仕事の合間を埋めて満足していました。ヒマラヤ登山のツアーに憧れて一生に一度はと昭和五十四年心肺鍛錬の為マラソンを実行し十泊十一日の南アルプス全山縦走も体験しました。

初峯テントピーク以後山恋い断ち難くパルチャモ峰に二回、メラピーク、アイランドピークと六千米峰に挑戦し続けました。妻を伴ってナンダデビーとランタン山麓トレッキング、山岳会四十周年記念レーニン峰が遠征の最後でした。日本百名山には家族登山を心がけ夏休み長期旅行で、第百番目は南アの悪沢岳でした。冬山単独行は守ってくれる仲間がない危険を冒すことになるが、やり甲斐に魅せられて度々縦走に出かけるのでした。

思い出としては泉市南光台消防分団で十年間活躍し停年退職、南光台東小学校PTA会長を三年間勤務、二〇〇〇年から岩手北上フルマラソンに四年間参加完走、山形東根のリング果樹園に援農研修六ヶ年に及ぶ通学、出羽三山秋の峰修験に参集し七日間の修行に耐えた事、泉市南光台社会福祉協議会でイベント、講話会、旅行会などに看板や民謡で十年奉仕させてもらいました。

終の住み処として三年前新築し静かに生活して今日喜寿を迎えました。あの青白きチビ少年がこんなに長生きできたのも山の神様のお蔭と感謝しております。

平成二十二年三月二十六日

今出隆康



前人未踏に行く

・破天荒な荒行を極めた、現代の修験者を讃える。

その人が生まれてくるのは、偶然にすぎないという。そしてそこには何らの意味もないのだと、哲学者は言う。ずいぶん冷たい言い草ではないか。

それがいやならば、宗教者が人の生死に神の存在を示してくれる。神がその人に生をもたらし、意味を付与した。だから人は神の真理に奉仕する存在であり、死ねば神の御もとに行ける。神を信じていれば、あなたは決して孤独ではないのだ、と。

神を持たない現代の私たちの生に意味がないとしたら、どうすれば良いというのだろう。哲学者は、「あなた自身で、あなたの人生の意味を創りなさい」と言うのである。神に頼るのではない、自分の人生の意味は自分で創れ、と。

今出氏の登山一覧を見るにつけ、私には彼の思いが見えてくるような気がしてならない。冬の独り道を黙々とたどる姿に、神を頼らずして自ら生きる意味を模索する現代の修験者の姿を見るからだ。

まさに前人未到の記録である。重い冬山装備を独り担ぎ、どこまでも続くラッセルを黙々と日没まで続け、吹雪いてくれば雪の中に寝る。それを何日も繰り返し、自分が立てた目的地に向かう。出発点を歩き始め、到着点に至るといごく簡単な放物線を描く行為は、ギリシャ神話のシジフォスもかくあらんかという姿であり、しかしながら再現可能な記録である。

過酷なまでに自分を追い込んで、妥協を許さない登山スタイルを貫くことは、どれほど苦しいのか。きつと過重なストレスを生んだことだろう。余人にできることではとうてい。過去に同じような計画を企てて挑み、そうして命を失った登山者も少なくないので



昭和62年、筆者53歳
ヒマラヤ・メラピークにて

はないか。しかし今出氏はことごとく生還してきた。それでなくても、志半ばにしてあきらめ、また身過ぎ世過ぎのなかに志を失ってしまうのが私たちの常である。今出氏の、初志を貫き通す精神力はどこにあったのだろうか。

人生とは何かを追い求めゆく旅だとすれば、今出氏の登山こそ人はなぜ生きるか、の問いに自ら答えて行った作業であったと言えるだろう。そうして彼は、誰にも奪われない掌中の珠を得た。自らに自らの存在を示すことができた。今出氏こそまれに見る幸せ者であり、人生の勝者と褒めそやしても過言ではないだろう。神を持たない現代の修行僧に乾杯！を挙げよう。

仙台YMCA山岳会会員 深野 稔生